

短期海外研修にもとづく非言語行動意識の推移 ——異文化コミュニケーション的見地よりの一考察——

Yukiko S. Jolly

I. 仮説と目的

当研究は短期間、即ち1ないし2ヶ月間の海外研修において受講者の非言語行動への意識は、ある程度高い方向に推移するであろうという仮説のもとに調査を実施すると共に、その推移の程度を数値で確かめてみるのが研究者の意図である。

上記仮説を研究者の勤務校の31名の学生の短期海外研修の渡航前(pretest)と帰国後(post test)にアンケートによる回答を求めることにより、比較、対照して何らかの結果を得ることを目的とする「パイロット」研究と位置付けて、研究を進めものである。

II. 非言語 (Nonverbal Communication) の定義と重要性

1. 定義

Edward Taylor Hall の *The Silent Language* (1959) によると非言語コミュニケーションとは「沈黙の言葉」であるとしている。一方、Marjorie F. Vargas は *An Introduction to Nonverbal Communication* (1987, p.5) の中で、非言語コミュニケーションとは「ことばならざることば」と定義している。石井敏 (1987, p.92) によると「言語的要素を除いた音声的特徴、身体各部の動作、身体的接触、物品、空間及び時間などの非言語記号によるメッセージの相互交換である」、としている。

そこで筆者の定義は最後の石井敏に近い位置をとり、非言語コミュニケーションとは言語以外のコミュニケーションの手段で、それは社会活動における人間の身振り、動作、相互の距離観、空間の使用の仕方、匂いや香りへの意識や実践、時間の使い方、対物感覚、色、デザイン、サイズの大小、方向、順序、線、点、などのような象徴物を指して言うことと定義する。

当非言語コミュニケーション分野の下位カテゴリー数は、学者によって橋本 (1993, pp.183-190) の7説から始まり John Condon (1980, pp.123-124) の24種類説までである。当研究においては理解の難易度を助けることを目的として、最も機能的と考えられる、以下の10種類を採用する。

1. Vocalics (音調) : または周辺言語学 (para linguistics) で、話す声の調子、音量、スピード、高低など
2. Kinesics (身体動作学) 頭から足の先まで、特にアイコンタクト (視線接触学又

・Oculesics) などを含む体の動きの分野

3. Proxemics (近接学または社会距離学) : 社会行動における人間 (動物) の距離のとり方
4. Space (空間学) : 縦、横の空間の使用法についての分野
5. Territoriality (領土学) : 人間 (動物) の縄張り、所有間を考える分野
6. Tactility (Haptics) (身体接触学) : 相手に手や足等を使って触れて好意 (又は悪意) を伝達する行動
7. Chronemics (時間概念学) : 当該文化の時間の使い方の特徴を分析する分野
8. Olfaction (嗅覚表現学) : 自分を効果的にアピールする方法
9. Objectics (対物表現学) : 道具、機械、芸術品、建造物、衣服、装飾品、サイズ、色、材質などを使用してのコミュニケーションの分野
10. Other (その他) : 線、光 (明暗) ベル (音)、煙 (のろし)、沈黙、体型、味覚、ドアの開閉による意味表現など

次に我々人間の社会活動におけるコミュニケーション行動の中での非言語コミュニケーションの重要性を考慮する。アメリカの心理学者である Albert Mehrabian (1968, p.52) によると、日常の意思疎通は言葉によるコミュニケーションは 7% で、周辺言語 (Paralanguage) に頼るコミュニケーションが 38%、及び顔の表情などの非言語動作によって伝えられる話者の意図は 55% である。従って言葉が僅か 7% であるのに対し、その他の非言語コミュニケーション表現に依存する割合は 93% となるという近似値を用いた等式を表している。

一方、アメリカの文化人類学者である Ray L. Birdwhistell (1970) によると 35% が言葉による意思疎通で、残りの 65% が非言語行動によって伝達されるとある。上記の二つの先行研究例から見ても、非言語コミュニケーション (以下 NVC とする) の重要性は明らかである。

III. 愛知淑徳大学、平成 14 年度短期研修 (Seminar Overseas) の概要

本研究の基本となる上記大学コミュニケーション学部、言語コミュニケーション学科 3 年生の夏季集中講座 (Seminar Overseas) は自由参加による学生の 1 か月の海外研修プログラムである。終了後、研修先大学より、受講結果による成績が与えられ、8 単位習得可能な講座である。平成 14 年 6・7 月中に、6 回の海外研修に関する事前ガイダンスを行い、渡航前の準備、渡米中の心構えなどを学び、また渡航事務手続きを 1 回別途実施、合計 7 回のガイダンスを実施した。

参加人数は一昨年、平成 13 年 9 月 11 日のアメリカにおける同時多発テロのためであるのか、予想をはるか下回る参加人数となった。グループ 1 は 7 月 31 日から 8 月 31 日まで

の32日間 University of Minnesota へ13名、グループ2は8月16日から9月19日までの35日間 West Virginia University に18名が参加した。

IV. アンケート内容

アンケートは記名式で行われ、渡航前と帰国後の個人別の比較、対照が明確になるよう企画された。被験者は、頁数が多ければ、回答のための記入を敬遠する傾向にあるので紙面は1ページに制約、質問の簡素化を計り、全部で12問に絞った。内容は先述のNVCの10種類より構成される下位分野表 (Taxonomy) を基盤として作製された。また出発前と帰国後のアンケートの調査内容はまったく同じであり、相違点は当研究の目的にのっとり、出発前と帰国後の推移・比較を行うために、質問文言の中の動詞の時制 (テンス) が変更したのみである。

Seminar Overseas 出発前アンケート

今までの経験を振り返って、下の1~5までの該当する項目に○印をつけて下さい。

1. 日本人同士のアイコンタクト (他人と目を合わせる) について経験したり、考えたりしたことがある。
1. ない 2. 殆どない 3. どちらでもない 4. 時々ある 5. よくある
2. 知らない日本人同士でも目が合うと、会釈、微笑み、ウインクなどの経験をしたり考えたりしたことがある。
1. ない 2. 殆どない 3. どちらでもない 4. 時々ある 5. よくある
3. 日本人同士の、縦、横の頭の振り方、うなずき方などについて経験したり考えたりしたことがある。
1. ない 2. 殆どない 3. どちらでもない 4. 時々ある 5. よくある
4. 日本人同士の、腕、手、指の動かし方 (ボディランゲージ) について経験したり考えたりしたことがある。
1. ない 2. 殆どない 3. どちらでもない 4. 時々ある 5. よくある
5. 日本人同士の、胸、胴 (腰)、足の動かし方、組み方等について経験したり考えたりしたことがある。
1. ない 2. 殆どない 3. どちらでもない 4. 時々ある 5. よくある
6. 日本人同士の、社会的 (人と人との) 距離や空間の使い方で経験したり考えたりしたことがある。
1. ない 2. 殆どない 3. どちらでもない 4. 時々ある 5. よくある
7. 日本人同士で、握手や友人の肩、子供の頭等に触れたりする接触について経験したり考え

たりしたことがある。

- 1.ない 2.殆どない 3.どちらでもない 4.時々ある 5.よくある
- 8.日本人の時間の使い方、時間の観念等について考えたことがある。
- 1.ない 2.殆どない 3.どちらでもない 4.時々ある 5.よくある
- 9.日本人が体臭、口臭を消すデオドラント剤を使用しているのに気付いたことがある。
- 1.ない 2.殆どない 3.どちらでもない 4.時々ある 5.よくある
- 10.日本人がつける香水、オーデオロン等が気になったことがある。
- 1.ない 2.殆どない 3.どちらでもない 4.時々ある 5.よくある
- 11.自分もデオドラントや香水を使っている。
- 1.ない 2.殆どない 3.どちらでもない 4.時々ある 5.よくある
- 12.会話（電話を含む）の途中の（少し長めの）沈黙について経験したり考えたことがある。
- 1.ない 2.殆どない 3.どちらでもない 4.時々ある 5.よくある

ID NO. _____ Name _____

Seminar Overseas 帰国後アンケート

アメリカ滞在中に考えたり、経験したことを思い出し、該当する項目の番号に○印をつけて下さい。「外国人」とはアメリカ人を含む、滞在中に出会った他の外国人も含まれます。

- 1.外国人とのアイコンタクト（他人と目を合わせる）について経験したり、考えたりした。
- 1.なかった 2.殆どなかった 3.どちらでもなかった 4.時々あった 5.よくあった
- 2.友人ではない外国人と目が合うと会釈、微笑み、ウインクなどをしてくれた。
- 1.なかった 2.殆どなかった 3.どちらでもなかった 4.時々あった 5.よくあった
- 3.外国人の、縦、横の頭の振り方、うなずき方などについて経験したり、考えたりした。
- 1.なかった 2.殆どなかった 3.どちらでもなかった 4.時々あった 5.よくあった
- 4.外国人の、腕、手、指の動かし方（ボディランゲージ）について経験したり考えたりした。
- 1.なかった 2.殆どなかった 3.どちらでもなかった 4.時々あった 5.よくあった
- 5.外国人の胸、胴（腰）、足の動かし方、組み方等について経験したり考えたりした。
- 1.なかった 2.殆どなかった 3.どちらでもなかった 4.時々あった 5.よくあった
- 6.外国人との、社会的（人と人との）距離や空間の使い方について経験したり考えたりした。
- 1.なかった 2.殆どなかった 3.どちらでもなかった 4.時々あった 5.よくあった
- 7.外国人との握手、キス、抱擁、友人の肩に触れたりするような接触について経験したり考えた。
- 1.なかった 2.殆どなかった 3.どちらでもなかった 4.時々あった 5.よくあった

8.外国人の時間の使い方、時間の観念について、気が付いたり考えた。

- 1.なかった 2.殆どなかった 3.どちらでもなかった 4.時々あった 5.よくあった

9.外国人が体臭、口臭を消すデオドラント剤を使用しているのに気付いた。

- 1.なかった 2.殆どなかった 3.どちらでもなかった 4.時々あった 5.よくあった

10.外国人がつける香水、オーデコロン等が気になった。

- 1.ならなかった 2.殆どならなかった 3.どちらでもなかった 4.時々なった
5.よくなった

11.自分もデオドラントや香水等を使うようになった。又はこれから使おうと思う。

- 1.使わない 2.殆ど使わない 3.どちらでもない 4.時々使う 5.よく使う

12.外国人と（電話を含む）会話の途中の（少し長めの）沈黙について、経験、考えた。

- 1.考えなかった 2.殆ど考えなかった 3.どちらでもない 4.時々考えた
5.よく考えた

ID NO. _____ Name _____

V. 統計的結果と解釈

A. University of Minnesota

学生番号	出発前・後	問い	-1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計	差
1	前	選択肢番号	4	2	4	2	2	4	3	5	2	4	4	5	41	
	後		5	5	4	5	3	4	5	3	4	3	5	5	51	10
2	前		4	3	4	4	3	4	4	4	5	5	4	4	48	
	後		5	4	4	5	4	3	5	4	4	4	5	4	51	3
3	前		4	3	4	4	3	3	2	3	2	3	4	4	39	
	後		3	4	4	4	3	4	4	3	3	4	4	4	44	5
4	前		4	5	5	4	2	5	4	4	4	4	5	5	51	
	後		4	4	5	5	5	5	5	5	1	1	4	4	48	-3
5	前		4	3	3	3	4	4	4	4	4	5	4	4	46	
	後		5	5	5	4	4	5	4	5	4	2	4	5	52	6
6	前		4	4	3	1	1	2	2	1	3	4	4	5	34	
	後		5	5	5	4	4	4	4	4	3	4	5	5	52	18
7	前		5	4	5	5	4	5	5	5	4	5	2	5	54	
	後		5	5	5	4	4	5	4	4	5	4	2	5	52	-2
8	前		4	2	3	2	2	4	3	2	2	4	4	4	36	

	後		5	5	3	4	3	4	4	4	3	4	2	4	45	9
9	前		5	5	5	5	2	5	4	3	5	5	4	5	53	
	後		5	5	5	5	4	4	5	3	2	2	3	4	47	-6
10	前		4	1	4	2	2	4	2	2	4	4	2	2	33	
	後		5	5	4	5	2	4	5	4	5	5	2	5	51	18
11	前		4	2	4	3	2	4	2	5	2	5	4	1	38	
	後		5	4	4	5	3	4	3	4	4	3	4	5	48	10
12	前		4	2	3	3	3	2	2	3	4	3	1	4	34	
	後		4	4	3	3	3	3	4	4	4	3	1	2	38	4
13	前		4	1	4	4	2	2	4	3	5	4	4	5	42	
	後		4	4	5	4	3	3	4	4	2	2	2	5	42	±0
平均値	前		4.15	2.85	3.92	3.23	2.46	3.69	3.15	3.38	3.54	4.23	3.54	4.08		
	後		4.62	4.54	4.31	4.38	3.46	4	4.31	3.92	3.38	3.15	3.31	4.38		

B. West Virginia University

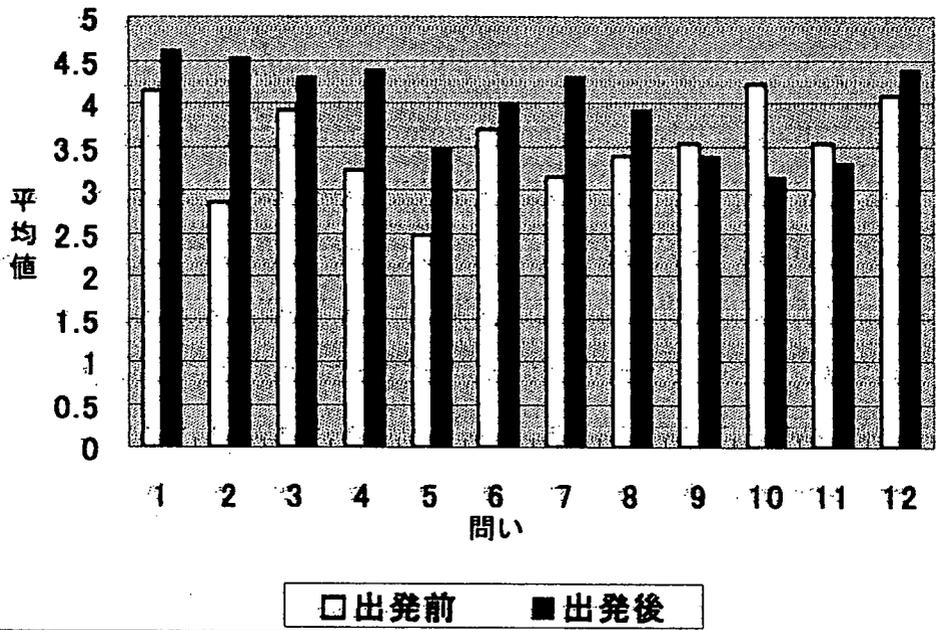
学生番号	出発前後	問い	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計	差
1	前	選択肢番号	5	4	4	4	3	4	4	4	3	4	1	5	45	
	後		4	4	3	4	4	2	5	4	5	4	2	2	43	-2
2	前		4	2	4	2	3	2	2	2	4	4	2	4	35	
	後		4	2	4	5	2	4	2	2	5	5	1	4	40	5
3	前		2	2	2	2	2	2	2	2	4	4	2	4	30	
	後		4	5	3	4	3	4	5	4	5	2	5	4	48	18
4	前		2	4	2	3	2	2	1	2	4	4	5	4	35	
	後		4	4	5	5	5	5	4	3	4	5	5	4	53	18
5	前		4	4	4	4	2	5	5	2	1	1	5	5	42	
	後		5	5	5	5	3	2	5	4	2	2	5	4	47	5
6	前		4	1	4	4	2	4	4	2	5	5	5	4	44	
	後		5	4	4	5	2	3	5	4	4	4	5	4	49	5
7	前		2	1	4	2	2	1	1	1	2	4	1	4	25	
	後		2	2	2	2	2	2	4	4	5	5	3	2	35	10
8	前		4	2	5	1	2	3	2	4	4	4	4	5	40	
	後		4	5	3	4	1	4	5	4	1	2	3	2	38	-2
9	前		2	1	2	3	2	4	4	2	2	2	4	4	32	
	後		1	2	5	4	2	4	4	5	4	4	3	5	43	11
10	前		2	4	2	2	2	3	2	4	4	5	4	4	38	

	後		3	4	4	3	2	3	5	5	2	2	5	4	42	4
11	前		4	5	4	2	1	5	3	3	4	4	4	2	41	
	後		5	4	3	4	2	5	5	5	3	4	4	4	48	7
12	前		4	4	2	2	2	3	3	4	4	4	4	4	40	
	後		5	4	4	5	3	5	5	5	4	2	2	4	48	8
13	前		4	4	5	5	1	4	4	5	4	4	4	4	48	
	後		4	5	5	5	3	4	4	5	2	1	3	4	45	-3
14	前		4	4	4	2	2	4	2	3	2	4	2	5	38	
	後		5	4	4	5	2	4	4	3	3	4	3	4	45	7
15	前		5	2	4	2	2	4	2	4	5	4	4	5	43	
	後		4	4	3	4	3	4	4	5	4	2	2	5	44	1
16	前		4	2	4	3	3	4	4	2	4	4	2	4	40	
	後		4	2	4	5	2	4	5	5	4	2	2	5	44	4
17	前		4	4	4	4	3	5	3	4	2	4	3	4	44	
	後		5	4	3	4	4	4	5	3	3	3	4	4	46	2
18	前		5	1	4	4	2	4	4	4	4	2	5	5	44	
	後		5	4	5	5	5	5	5	5	5	4	2	5	55	11
平均値	前		3.61	2.83	3.56	2.83	2.11	3.5	2.89	3	3.44	3.72	3.39	4.22		
	後		4.06	3.78	3.83	4.33	2.78	3.78	4.5	4.17	3.61	3.17	3.28	3.89		

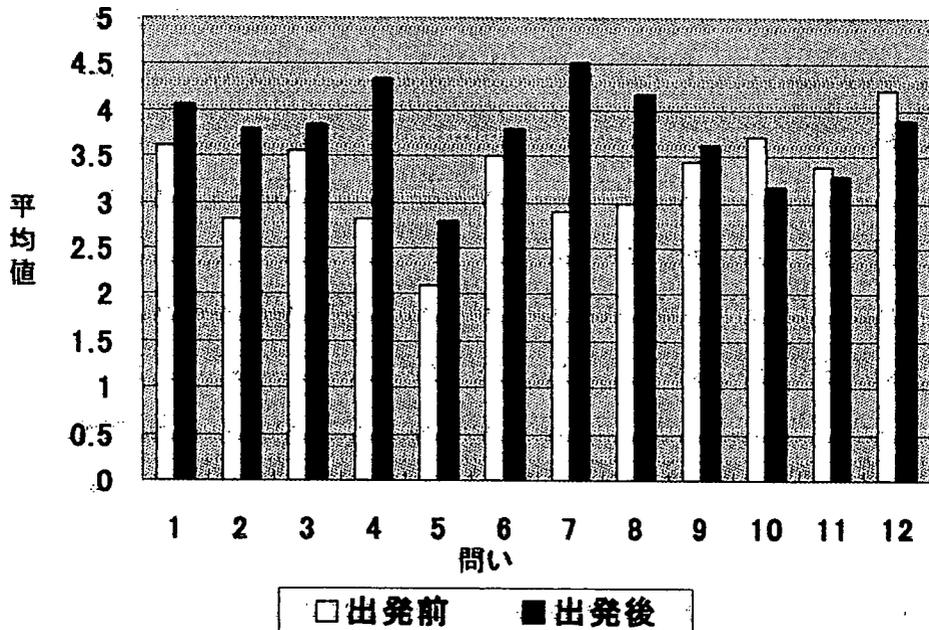
まず、上記の表の見方の例として、ミネソタ大学での研修に参加した13名のうちの1名の学生について、見てみよう。当学生は出発前のアンケートにおいては、問い1、即ち「日本人同士のアイコンタクト（他人と目を合わせる）について経験したり考えたりしたことがある」に対しては、彼女は4点の「時々ある」に丸印を付けている。そして最後の問い12、「会話（電話を含む）の途中の（少し長めの）沈黙について経験したり考えたことがある」は「よくある」の5点に丸印をつけて回答している。彼女の問い1から12までの回答の合計点数は41点である。同じ学生が帰国後に問い1に対しては5点を選択しているのに対し、問い12にもまた5点を選んでいる。その合計点は51点になり、帰国後の合計点から出発前の合計点を差し引くと、その差は帰国後の方がプラス10点になっている。このように見ていくと、13名の学生の出発前と帰国後との差が+10、+3、+5、-3、+6、+18、-2、+9、-6、+18、+10、+4、±0という結果になった。

また、同じ問い1に対しての合計13名の学生の（表の縦最下位にある）合計平均値数は、4.15が出発前で帰国後は4.62になる。以上の結果をミネソタ大学とウエストバージニア大学の二つの行き先別に棒グラフに表したものが次の2枚の表である。

アンケート結果 (Univ. of Minnesota)



アンケート結果 (West Virginia Univ.)



グループ1に関しては、問い1、2、3、4、5、6、7、8、及び12はすべて帰国後の値の方が高いことが明らかになった。帰国後の方の数値が低いのは9、10、11の3つであるがこれは全て嗅覚（Olfaction）に関連する問いである。この結果から、研究者に判明したことは、現在の大学生達の多くが体臭、口臭を消すデオドラントや香水、オーデコロンなどに対して関心を持っているだけでなく、日常使っていて、特に海外に渡航しても外国人のそれ等の使用、効果などが余り気にならなかったことを示していると考えられる。

同様に、グループ2を分析しても類似した結果が得られることが解った。言い換えれば棒グラフは問い10、11、12以外はすべて当調査者の仮説通りに帰国後の方が高い数値を示している。即ち、(1) 非言語コミュニケーションの要素に対しての被験者の意識の推移が存在し、且つ(2) 高まっているという仮説への合致をみることになる。

調査者は、被験者である大学生達が渡航直後、アメリカ人の olfaction（嗅覚表現学）に対する意識、社会行動のレベルに気付く、又は驚くであろうと予想していた。しかし、被験者31名の内、30名が女子大学生達で構成されており、普段からキャンパス生活においても、香水やオーデコロンを常用していることが数値でもって判明された。

V. 今後の課題

今回の研究は初めての「パイロット調査」なので、アンケートの文言の妥当性、数値化による結果への信頼性をさらに詰める必要性を感じた。被験者数が僅か合計31名という現実で、統計結果への信頼度は未だ低いということも痛感した。

ミネソタとウエストヴァージニア州という地理的条件の違い、及び研修期間中のホームステイ先の家族構成や人種そのものの相違に由来する結果の違いにも注目した。ミネソタグループが実施した小旅行やシカゴへの研修旅行、ウエストヴァージニアグループが実施した東海岸への研修旅行や行事の中での単独行動等には、幾つかの変数要素（deviation elements）が考慮される。将来的には、これらの課題を熟考し、今回のパイロット・プロジェクトで取得したノウハウを生かして、更に信頼度の高い結果を得るべく研究を重ねていく必要がある

最後に、今回の調査研究を支援して戴いた学科長の松本青也教授、学部等事務室の山田千晶さん、そして、2回のアンケート調査に協力くださった本学コミュニケーション学部言語コミュニケーション学科3年生の31名の学生被験者に、深く感謝の意を表する次第である。

参考文献

- 石井敏 (1987) 「言語メッセージと非言語メッセージ」 吉田暁監修『異文化コミュニケーション』第4章 有斐閣選書
- 橋本満弘, 石井敏 (編) (1993) 「非言語コミュニケーションの概念と特徴」『コミュニケーション論入門』第7章 桐原書店
- 勝又恵理子 (1997) 「非言語コミュニケーションと異文化理解」『情報文化論 Theory of Information Culture』
- Birdwhistell, R. L. (1970) *Kinesics and Context —Essays on Body Motion Communication* University of Pennsylvania Press
- Condon, J. and F. Yousef (1980) *An Introduction to Intercultural Communication* Bobbs-Merril Educational Publishing
- Hall, E. T. (1959) *The Silent Language* NANUN·DO
- Mehrabian, A. (1968) “Communication Without Words” *Psychology Today, II*
- Vargas, M. (1987) 『非言語コミュニケーション』新潮選書